

# 幼児の芸術活動と人間形成

牛 島 義 友



現代生活において生活が機械化され、人間疎外が問題となってきたが、この人間性を回復するためには情緒的のものが、必要です。理性的のものはますます生活を機械化し能率化するだけであるので、人間関係を構成する相互理解、信頼、愛情が必要であり、またこのような情緒的のものが基調となっている芸術の世界が心をなぐさめ、いやしてくれる。芸術は失なわれた人間性を再生 (recreate) してくれるし、また今日、音楽療法や、描画療法などのように傷ついた心の治療方法としてさえ取り上げられるようになった。

この人間回復のためにはもっと別の方法もあるかもしれない。たとえばアルコールや薬物によって心の傷をいやしたり、競輪やかけごこで現実不満を一気に取り戻そうとしたり、性的感覚陶酔の中に現実を忘れることもできよう。しかし昔からの酒・女・ば

くちはいわゆる三悪であつてもっと昇華された弊害のないリクリエーションの方法としては、スポーツと芸術が求められる。音楽や絵を見ることによってその心が再生できることが教養のある人間としての姿であり、このような生き方を樂しめるために幼児期の情操教育を重視しているといえよう。

幼児の生活は自発性と獨創性に満ちており、それは彼らを芸術的活動へと導く重要な要素である。これは彼らの遊びの生活に自然に表現されている。したがって幼児たちが十分に完全に遊ぶことがまず第一に重要である。この子どもの遊びがしかし今日では余り喜ばれていない。ピューリタンの家庭では勤勞を第一としたために幼児の遊びが罪惡視されたことがあるが、今日は科学主義が支配的であるために幼児の遊びが無視されがちである。子どもの遊びの生活は想像的で、その意味では現実模倣的であつたり架

空の世界になりやすい。これを早く知識生活に導入するのが教育であると思つてゐるらしい。

幼稚園においても自由遊びを奨励したり、保育項目として遊戯を表面に出すことをさけるようになった。フランスの保育では自由遊びはなく、すべては計画保育であり、一斉指導的であるのに驚いたことがあるが、今日の日本の教育も学習指導的要素がふえ、計画的指導が強くなつてきた。なせもつと子どもたちを自由に遊ばせようとなないのであろうか。青年期の教育の場合にただ職業教育や資格獲得のための教育でなく、一般教育とか、哲学的な教科を重視したり、学校外の青年期の生活を豊かに持つこと、悔いなく青春を体験することが人生にとって有意義であるといわれるが、それ以上に幼児たちが学習とか計画指導から離れて想像生活を楽しみ、遊びの生活に没入することが必要であらう。それは自発的探求心を生み、生活を断片的に見るのではなく総合的に体験させ、生きることの楽しさを最もはつきり教えてくれるものである。

このような幼児時代を豊かに経験した人は心のふるさととしていつも幼児時代が浮かんでくることであらう。精神分析は生の本能と共に死の本能を説いているが、前者は積極的に現実問題を解決し創造していく力である。しかしこの力は他面それに休息を与え、挫折を救うもう一つの原理によつておぎなわねばならない。

これは休息や涅槃を求める心であり、過去の世界に退行する気持ちである。

退行現象というとすぐ不適応行動といわれるけれども、これは挫折した心をいやすのに最も適応した行動なのである。乳児が母の胸に抱かれるように絶対の信頼感に包まれた時にその心は落ちつきを取り戻す。乳児時代は追憶の及ばない時期であるので、いわば無意識的にこの母を求めるわけであるが、記憶の世界としては幼児期の生活の姿、それも幼児と同じような、純粹さをもつた自然の中で花をつみ、魚を捕えて暮らしたような生活体験に復帰することによつてその心のふるさとを感じ、そこから新たな創造力や詩想が湧いてくる。

農村で育つた人には必ずこのような強い心のふるさとがある。ところが都会育ちの人には意外に幼児期の想い出としてのイメージが乏しく、幼児時代に何も想い出すことがないという人も少なくない。これは不幸なことであり、この貧しい心からは芸術的なものが生まれることも少なからう。

次に幼児期においてその感受性を養ふことが必要である。色彩や音に対する感受性は精神年齢一、二歳の段階でも十分に養われる。重度の精薄で精神年齢一、二歳の子どもでも意外に早く歌を覚えるし、しかも音程は正確である。歌詞の方は出たらめであつても音の方は正確である。もつとも普通の幼児はこれほど正

確には歌えず強弱のみで音の高低をごまかしている場合もあるが、それは彼らの発声機構が未発達のためであって耳の方まで音痴であるわけではない。故に乳児時代によい音楽を聞かせることの重要性が考えられる。しかもここで必要なのは反復して与えることである。今日の子どもに反復して与えられる刺激はコマージヤルソングであるが、このことが子どもに与える影響は少なくない。音楽は子どもにも意外によく理解され、それだけによい音楽と悪い音楽も区別されるべきでなかろうか。古く孔子はこのことを指摘し淫靡な音曲の与える弊害を強調している。

色彩や形に対する感受性や弁別力も年少幼児において十分発達する。故にこの時代から調和的の美しい色彩を経験させることが彼らの美術教育に大切である。日本の生活環境は色彩に乏しくまた鈍感である。毎室のベンキを塗りかえる生活では自ずから色彩に対して敏感になるであろう。幼児の室や保育室などの色彩については特に心を配る必要がある。この場合ベンキ屋まかせにするとかベケバしくなったり、不調和になったりすることが多い。さらに絵本の色彩、あるいはその描き方が芸術的なものであることが必要である。この幼少期に植えつけられた感覚感受性は一生残り、いわゆる教養の水準を示すこととなる。

このように生活の感覚的素材がまず十分に洗練されたものであることがのぞましい。

次に幼児がもっとも自由に創造活動をなすのは絵画を中心とした造形の世界である。そのなぐり描きやフィンガーペインティングの中にも子どもの情緒が直接表現されるし、さらに形がある程度描けるようになると、直接には子どもの知的能力の反映でもあるし、おさえられた欲求や願望を投射するものでもある。この心のうったえと能力を駆使して自由に画面に現わすことができる。

純粹の意味で芸術活動に近いものといえよこの描画の世界であろう。この絵はふしぎと恵まれた家庭環境に育ったものは案外に内容に乏しく余りうったえるものを持たぬようである。これに反し心に欲求不満をもち、しかも自然の環境に育ったものの方がすばらしい絵を描く。他の教科学習だと都合児の恵まれた家庭の者が優秀であるが、絵の場合はそうでないようである。

この描画活動が人の性格形成にどのように影響するかはよくわからない。たとえば芸術的な創造性が科学者としての創造性につながるかどうかはつまりわからない。また幼児時代によい絵を描いた子どもが一般に成長に応じて平凡な概念的な絵を描くようになるし、創造性は枯渇してくる。しかし絵を描いている時に直接その欲求不満を満たし、心理療法的役割を果たすことは確実である。したがってもし絵を描くことを知らなかったら萎縮しゆがめられたものが素直に成長するといつてよからう。

子どもに音楽や踊りを習わすことは、芸術活動というよりも子

どもに技術を教え、生活の型を習得させるのに非常に役立つ。普通このような技術や型は芸術活動としては軽視、あるいは拒否されている。たしかに子どもが音楽のけい古をする時には自由な創造活動ができるわけではなく、いやがるのをむりに練習させるということさえ多い。自由な音楽活動といえはむしろ即興的に勝手に歌う気まぐれな鼻唄ぐらいで、音楽のけい古となると必ず正しい音の出し方、楽譜の読み方が強いられる。踊りのけい古だと勝手な表現運動ではなく、基本的の型が仕こまれる。この訓練は本格的の芸術活動に入る基礎であり、遊び半分のことではない。しかしこの基礎の修練を受けておかなければ、少なくとも譜が読めなければ後になって音楽の演奏を楽しむことはできない。

青年期になると音楽などの興味が急に高まってくるが、この場合に幼児期の訓練をうけたものは演奏を楽しむことができるし、それのないものはレコード鑑賞家となるであろう。スポーツを自ら行なう者と試合を見るのとは根本的に相違するが、音楽を楽しむにしても自ら演奏することの方がその楽しみは数倍する。

その他日本のおけい古ことでは技術よりも更にその前にある作法が重視される。茶道などはそのマナーだけで成り立っているともいえよう。このマナーを通しての教育は今日極端に軽視されている。しかしこれは現実の生活に区切りをつけて早くその道にはいれるようにする誘導法とも解釈できる。一動作ごとに心をくば

り、緊張してなされるものもやがて無心の形で作法通りのふるまいがなされ、しかもたえず新しい事態に対処できる十分の備えがなされている。この身心が一体となることは技術の修練と共に精神の修養となり、人間形成の重要な方法となる。芸道を極める人も武道に修練する人も等しく禅の道に通じてくる。このいわば日本の修業の道、人間形成も再認識すべきであろう。

またわがくにの幼児の芸術教育では創造活動が強調されすぎて伝統的な芸能を維持する面が少ない。郷土芸術はその郷土の生活の中で伝えられ、その技もますます練られている。

これを媒介として人々は歴史の中に生きる存在であることを強く感ずる。新しい芸術運動はこのような他とはっきり区別される類型的なものが、異種の美の類型と接触し総合されることによつて新しいものへと開花して行く。インドの学校では英語やその他の教科では世界共通のものをとり入れるが、音楽の時間は断固として伝統的なものを守ろうとしているのに強く打たれたが、わが国はこのような心がまえば余りにも少ないのではなからうか。今日の日本人は音楽にしても、文学にしても絵画にしても西欧的な文化をいきなり吸収しているが、これでは結局その亜流に止まり、西欧以上の芸術文化を生み出すことは困難ではなからうか。伝統にとらわれることもよくないが、伝統をもたないことも淋しいことではなからうか。